

徳島県立博物館常設展全面リニューアルまでのプロセス—その成果と課題—

磯本宏紀¹

[Hironori Isomoto¹: The process of renewal of the permanent exhibition of the Tokushima Prefectural Museum:
Its achievements and issues]

キーワード: 徳島まるづかみ、展示、利用者参加型、インクルーシブデザイン

摘要: 本稿は、徳島県立博物館が行った常設展全面リニューアルまでのプロセスについて報告した。

2018年度の事業化から2021年8月のリニューアルオープンまでの工程を、利用者参加型の取り組みに焦点を当てながら紹介した。リニューアルまでの工程については、時系列に(1)事業化以前:2017年9月～2018年8月、(2)展示設計期:2018年9月～2019年10月、(3)展示製作期:2020年3月～2021年7月の3期に分けて記述した。そのうえで、一連の事業から得られた成果と課題について明示した。

1 はじめに

2021年8月9日、徳島県立博物館は、全面リニューアルした常設展を公開した。この常設展リニューアルまでのプロセスには、2018年度の事業化からオープンに至るまでに3年間、さらに事業の準備期間を含めると約4年間で費やした。この間、当館は常設展に反映するために様々な取り組みを進めてきた。展示に向けた調査や資料収集、撮影、コンテンツ製作などに加え、展示技法や展示のあり方の検討、利用者からのヒアリング、利用者動向の調査やマーケティング調査などを行った。こうした様々な取り組みによる成果のなかには、何らかのかたちで展示に反映できたものがある一方、今なお課題として継続して検討を続けなければならないものもある。

常設展の全面リニューアルは、開館30年以上が過ぎて漸く実施できた事業であった。常設展リニューアルに向けた取り組みは、その時期だからこそ、またそうした工程下だからこそ実施できた特別なものであった。これについて、その成果と課題を明らかにしたうえで記録化することは、当館の記録としても、後続で事業を展開する他の博物館や関係機関にとっても意義あることだと考える⁽¹⁾。

そこで本稿では、常設展リニューアルまでのプロセスについての記録として記述し、常設展リニューアルをめぐる一連の事業を通じて得られた成果と、残された課題について明示することを目的とする。ここでは、徳島県立博物館が常設展リニューアルを進めていた間、第4期中期活動目

標(2019～2023年度)において「連 つながりを大切にし、だれもがとどえる博物館」(徳島県立博物館編、2023:2)⁽²⁾を使命のひとつとしていることを踏まえ、とくに常設展リニューアルのプロセスにおける利用者参加型の取り組みについてクローズアップすることとする。

なお、リニューアルの工程は在籍した各博物館職員(学芸員以外も含めて)が主体的に取り組んできたものであったが、そのなかで筆者はおもに展示業務統括担当及び民俗分野担当の学芸員として取り組んだ。本稿はそうした立場から記述したものである。

以降、「2 常設展リニューアル工程における取り組み」では、常設展リニューアルまでのプロセスについての概略を工程順に記述し、そのなかでこれまでに行われてこなかった新たな試みとして、とくに様々な機関や人びととの連携・協力にもとづき実施した事業を中心に「3 常設展リニューアルに向けた利用者参加型の取り組み」として紹介する。そのうえで、様々な取り組みによる成果を展示に盛り込んでいく最終工程と、その工程で十分に対応できなかったこと、リニューアルオープン後に明らかになった課題などについては、「4 常設展リニューアルオープンに向けた最終工程で残された課題」で整理することとする。

2 常設展リニューアル工程における取り組み

常設展リニューアルに至るまでのプロセスの概要は、次

2024年12月8日受付、1月10日受理。

¹ 徳島県立博物館、〒770-8070 徳島市八万町 文化の森総合公園。Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-cho, Tokushima 770-8070, Japan

のとおりである⁽³⁾。

- ・2017年9～10月 「未来創造！博物館新常設展構築事業推進タスクフォース」による検討
- ・2018年2月 「未来の博物館を考える検討委員会」による「未来の博物館を考える検討委員会提言書—徳島県立博物館新常設展基本計画案」の提示
- ・2018年4～5月 「県民とともに新常設展を考えるワークショップ」による検討
- ・2018年7月 「徳島県立博物館新常設展基本構想」の策定
- ・2018年10月～2019年3月 新常設展基本設計
- ・2019年4～10月 新常設展実施設計
 - ※2019年9月1日より旧常設展示室を閉室
- ・2020年9月～2021年7月 新常設展展示製作
- ・2021年8月6・7日 新常設展内覧会
- ・2021年8月9日 新常設展リニューアルオープン

これらの工程をさらに整理すると、事業化以前の検討及び基本構想策定など、展示設計（基本設計、実施設計）、展示製作の3工程に大きく分けられる。本稿では、

- (1) 事業化以前：2017年9月～2018年8月
- (2) 展示設計期：2018年9月～2019年10月
- (3) 展示製作期：2020年3月～2021年7月

の3期に分けて整理する。常設展リニューアルのプロセスにおいて、博物館利用者や協力者をはじめ、関連する行政分野（文化財、観光）、社会教育機関、各分野の有識者、ワークショップでのリードユーザーやファシリテーター、展示業、広告業、観光業の委託業者など多様な関係者との協力・連携の内、とくに展示内容やデザインの決定に影響を与えた代表的な取り組みを、時期区分ごとに取り上げたい。

(1) 事業化以前の時期は、課題や可能性を探り、新常設展の構想や方向性を創り上げていった時期、(2) 展示設計期は、基本構想にもとづき常設展リニューアルが事業化され、具体的な展示設計が進められていった時期、(3) 展示製作期は、展示設計にもとづき展示製作が進められていった時期であった。

(1) 事業化以前（2017年9月～2018年8月）

■2017年9～10月：「未来創造！博物館新常設展構築事業推進タスクフォース」による検討

文化財、観光部門の行政職員（県職員）、大学教員、文化の森内併設館の若手メンバー及び当館学芸員によるワーキンググループにより、常設展に新たに組み込みたい要素や方向性の抽出など、望まれる常設展のあり方を検討した。

石川県立歴史博物館、高知県立高知城歴史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、兵庫県立考古博物館、福井県立恐竜博物館、三重県総合博物館の視察をふまえ、検討を行った。この結果を、ランチミーティングで県知事に報告した（徳島県立博物館編、2018：14-15）。

■2018年2月：「未来の博物館を考える検討委員会」による「未来の博物館を考える検討委員会提言書—徳島県立博物館新常設展基本計画案」の提示

この委員会を博物館運営、歴史学、生物学、行政・教育分野などに詳しい有識者で構成し、新しい常設展のあり方について検討を進め、提言をもらった。この検討委員会による基本計画案が、新常設展の後の設計に対する基本的な考え方、空間構成に反映されることになった（徳島県立博物館編、2018：15）。

■2018年4～5月：「県民とともに新常設展を考えるワークショップ」による検討

これは、インクルーシブ⁽⁴⁾な取り組みのひとつとも言えるもので、公募によっておもに利用者の参加を募り、4月30日と5月13日の2度にわたり実施した。

「未来の博物館を考える検討委員会」における提言をベースにした新常設展基本計画案について、公募による参加者よりコメントをもらった。あわせて、県内外の有識者（他館の学芸員、大学教員、博物館運営経験者など）からのアドバイスを受けた。ワークショップへのおもな参加者には、ふだんからの博物館利用者（友の会会員、ボランティア、化石研究グループ、海の観察会など）10歳台から60歳台までの延べ34人と、各分野の専門家延べ9人、アドバイザー2人が参加して意見を交わした（徳島県立博物館編、2019：13）。

■2018年7月：「徳島県立博物館新常設展基本構想」の策定

それまでの検討結果をふまえ、「基本構想」では、「徳島まるづかみ！—いのち」と“とき”のモノ語り—」を、県内外から訪れた利用者が、徳島の自然や歴史、文化を俯瞰し、徳島の魅力や特色を実感できる展示を目指すことを基本方針に掲げた。また、常設展の特徴としては次の4点を掲げた。

- ①実物資料との出会い
- ②AR・VRや高精細映像を活用した体験型展示
- ③誰もが楽しめる場所：多言語化や音声・手話解説、多機能解説設備
- ④地域の交流拠点

また、先に開催された「未来の博物館を考える検討委員会」や「県民とともに新常設展を考えるワークショップ」における意見を踏まえ、「利用者との対話の重視」「フ

ィールド（地域）へのいざない」を留意すべき視点とした（徳島県教育委員会編．2018：10-11）。

この「基本構想」にもとづき、同年9月には新常設展設計事業業務委託公募型プロポーザルを実施した。

（2）展示設計期（2018年9月～2019年10月）

展示業者4社が参加したプロポーザルの結果、乃村工藝社への委託が決まった。以後、乃村工藝社との協議、協働により業務を進めた。展示設計は、展示の構成やおもな展示資料、展示方法を決めて設計していく基本設計と、各展示における具体的な展示方法、コンテンツの内容を決めていく実施設計に分けて行った。

基本設計は2018年9月～2019年3月の間、実施設計は2019年4月～10月の間に行った。設計に関する協議は、展示エリアや分野ごとにA：全体、B（人文）、B（自然）、C：モニター調査、PR企画の4つの分科会で行った。検討内容は次のとおりである。

分科会A：全般、ロビーゾーン、コミュニケーションゾーン、その他

分科会B（人文）：メインゾーン、ミュージアム・ストリート

分科会B（自然）部会：メインゾーン、ミュージアム・ストリート

分科会C：モニター調査、PR企画（徳島県立博物館編．2019：13）

各分科会による協議は、基本的には博物館側と展示業者側のみの参加で進めたが、検討の要所で、それまでの検討内容について第三者に加わってもらってワークショップなどで検証する機会を設定した。それらには次のものがある。ここでは概要を示し、具体的な検証内容や方法については、3章で詳述する。

■インクルーシブデザイン⁽⁵⁾ワークショップ及び学習会

多様な利用者を想定し、展示の設計、デザインを計画することは重要である。想定される利用者に計画段階で参加してもらい、ともに検討を進め、展示に反映させることを目指した。

リードユーザー（視覚障がいのある方、聴覚障がいのある方、車いすユーザー、日本語を母語としない方）及びファシリテーターとともに、博物館職員及び展示業者が参加し、多様な利用者にとっての展示のあり方、展示を理解するために必要な手法や考え方をソフト、ハードの両面から検証した。2019年1月29日に学習会を、同年5月24日、6月18日ワークショップを実施した。

以後、同様のワークショップを「展示製作期」にも実施した（徳島県立博物館編．2020：14-15）。なお、ここでの

検討内容は3章で詳述する。

■新常設展展示計画再点検のためのワークショップ

ファシリテーターの染川香澄氏を交え、設計段階での展示計画の相互チェックと意見交換を目的として、2019年5月16日に実施した（徳島県立博物館編．2020：14）。

（3）展示製作期（2020年3月～2021年7月）

展示製作期は、展示設計にもとづき、展示パネル、展示ラベルなどの原稿執筆、映像コンテンツの制作、模型など展示資料の製作を進め、同期最終盤には演示作業を行った。この工程期間にもインクルーシブデザインワークショップや新常設展展示計画再点検のためのワークショップなどを実施し、進めている展示製作の内容を確認、点検する作業をあわせて行った。

2021年7月には展示製作を完了し、8月7日の内覧会を経て、同月9日には新常設展を公開した。

■「徳島まるづかみ」事業⁽⁶⁾の実施

これは、2020（令和2）年度文化庁補助事業として、徳島県立博物館を事務局とする「徳島まるづかみ」事業実行委員会が主催した事業である。常設展リニューアルを想定した展覧会の実施とともに、展示に対する観覧者からの意見を聴取し、今後の展示製作に反映させることを目的とした事業である。この事業は、美馬市立図書館、海陽町立博物館との連携によるもので、それぞれの施設で連携して新常設展のプレ展示を開催した（「徳島まるづかみ」事業実行委員会編．2021）。ここでの利用者参加型の取り組みについては、3章で詳述する。

■インクルーシブデザインワークショップ

展示設計期に引き続き実施した。2020年8月28日と9月18日の2回実施した（徳島県立博物館編．2021：14-15）。

■新常設展展示内容再検討のためのワークショップ

展示設計期に引き続き実施した。2020年9月30日～10月1日、12月10日～11日の2回、4日間にわたり実施した（徳島県立博物館編．2021：15）。

3 常設展リニューアルに向けた利用者参加型の取り組み

常設展リニューアルに向けたプロセスにおける特色とも言えるのが、多様な利用者を巻き込んだ展示内容や展示方法の検討だった。2章でも概要を紹介したものであるが、その取り組みについて、具体的に述べたい。とくに多様な利用者を巻き込んだ結果、何が展示に反映されたのか、どのような効果があったのかについて論じたい。なお、ここ

での記述は、各取り組みにおける未公開の記録類などにもとづいて整理した。

(1) 県民とともに新常設展を考えるワークショップ

新常設展基本計画案を検討する段階で実施したワークショップだった。事業化以前と展示設計期に実施した。ここでは、常設展のあり方や展示構成、おもな展示テーマ、ゾーニングなど、常設展のもっとも基本的な内容を検討した。

旧常設展を公開中の時期でもあり、具体的な設計前の段階でもあったため、抽象的な提案が中心となったが、利用者の声として聴取することができた。そのうえで、その後の展示設計以降の取り組みのなかで実現していったものも多い。

①ゾーニング

基本的な展示構成案に賛同するとともに、エントランスのインパクトや「ワクワク、ドキドキ」感を求める意見、レファレンス機能の充実、県内の博物館やフィールドへいざなうための環境整備を求める意見、多分野が融合、連携した展示の継続、拡大を求める意見、床面や壁面の有効利用、休憩スペースの充実を求める意見が多かった。

実際、こうした意見を参考にしてエントランスの展示設計に重点が置かれたし、展示資料の画像検索システム機器を設置し、運用している。また、回廊型の動線となるミュージアム・ストリートでの休憩スペースの設置は、数は十分ではないが実現した。

②展示内容

展示テーマとして「徳島県らしい」あるいは「徳島県立博物館らしい」展示を求める声が多く、展示資料の理解につながるものや体感できるものとして、ハンズオン展示、映像展示を求める意見が多かった。いずれも、展示設計の工程以降、重点事項として取り組んだテーマだった。また、学芸員の仕事を紹介する映像展示を求める声があったが、これは学芸員の活動を紹介する展示コーナーの設置として実現し、そのなかで映像展示も可能な設備を整えた。

③その他の意見

授乳室やおむつ替えスペースの設置、オストメイト対応設備の充実を求める意見があった。授乳室やおむつ替えスペースは展示室外ではあるが同じ2階フロア内に新設した。また、展示室内のトイレにはオストメイト対応設備を設置した。

県民参加型展示に関する要望、展示替えしやすい環境づくりの提案があったが、これについては、県民との協働により実施した事業紹介や、協働により展示を行う「県民コレクション」コーナーの設置により実現した。

外国語母語話者対応の音声ガイド(英語、簡体字、繁体字、

韓国語の4言語)の貸し出しは、多機能展示解説アプリ「遊山ナビ」の実装により、Webを通じた情報保障を実現した。

(2) インクルーシブデザインワークショップの実施

①インクルーシブデザイン学習会

実施日：2019年1月29日

講師：塩瀬隆之氏(京都大学総合博物館)

参加者：博物館職員、乃村工芸社社員

塩瀬隆之氏を講師に迎え、インクルーシブデザインの考え方、実践例などについての学習会を行った。その後、旧常設展のサインなどハード面の確認、新常設展のゾーニングや動線に対する考え方など、設計段階だった展示計画について検討した。

なお、ワークショップには、博物館職員とともに、展示設計、展示製作に携わった乃村工芸社社員も参加し、検討を行った。こうしたスタイルは、展示製作の最終段階まで貫かれたこともあり、ワークショップなどでの成果を展示の随所に織り込むことができた。

②インクルーシブデザインワークショップ(1回目)

実施日：2019年5月24日

ファシリテーター：塩瀬隆之氏(京都大学総合博物館)、
山田小百合氏(NPO法人Collable)

リードユーザー：7人(車椅子利用者2人、徳島県在住
外国人2人、視覚障がい者1人、聴覚
障がい者2人)

手話通訳者：2人

参加者：染川香澄氏(ハンズ・オンプランニング)、博物館職員、近代美術館職員、二十一世紀館職員、
乃村工芸社社員

ワークショップは、4組(車椅子、視覚、聴覚、外国籍)のリードユーザーを中心として、参加者は4つの小グループに分かれて実施した。どのグループもリードユーザーとともに旧常設展示室内で議論をしながら展示や展示資料、設備などについて点検した。展示室でのリードユーザーの行動から、博物館展示における参加者による様々なバリアへの気づきを集約し、改善のための材料を集めることを目的とするものである。普段気づきにくい利用者目線からの検証を行うだけでなく、各リードユーザーとのコミュニケーションにより検証を進めた。

さらに、グループ内での気づきを模造紙に書いてまとめ、可視化することにより共有し、さらに検討を拓ける素材とした。

③インクルーシブデザインワークショップ(2回目)

開催日：2019年6月18日

ファシリテーター：塩瀬隆之氏(京都大学総合博物館)、

山田小百合氏（NPO 法人 Collable）

リードユーザー：7人（車椅子利用者2人、徳島県在住外国人2人、視覚障がい者1人、聴覚障がい者2人）

参加者：博物館職員、近代美術館職員、二十一世紀館職員、乃村工芸社社員

②のワークショップと同様に4グループにより、前回のワークショップで発見した展示や展示資料、設備などへの問題点への気づきにもとづき、今度はそれらの改善案を考え、それに対応するためのアイデアや試作品を、グループごとに創作した。ここでの作業は、結果的に実際の新常設展での展示設計、展示製作を想定したものとなった。

これらの成果が実際の展示デザインに反映されることになった。それぞれの小グループでの検討ごとに次の4例を紹介する。

■読み解きライン⁽⁷⁾のデザイン、キャプションの角度

展示ステージや展示ケースの観覧者側には展示解説パネルやハンズオン展示、映像機器を設置するための台を設置した。展示全体に共通したデザインであるが、その高さや大きさ、使い勝手は車いすユーザーや幼児などの視界や行動を制限するものとなりかねない。ワークショップによるデザインの検討により、適切なデザインのあり方を検討した。

■銅鐸の読み解きライン解説のデザイン

通常の展示解説は、展示としての視覚的な情報に加え、学芸員などによる聴覚的情報を追加することによって行われる。では、聴覚障がい者の場合にどういった配慮により音声情報に近いレベルでの情報提供が可能なのか。そのことを検討するため、実際に展示解説を行いながら想定される展示資料を観覧してもらった。だが、その人が聞こえにくいとかどうかにかかわらず、解説者から少し離れた位置にいた場合、展示解説をする声は届きにくい。さらに展示解説を手話通訳した場合、展示資料と手話通訳の両方を同時に見ることが必要となり、無理が生じる。

検討の結果、多種に及ぶ解説を利用者自身のペースで理解してもらうためには、聴覚情報によるのではなく、できるだけ多くの視覚情報、イラストなどを用いた多種の解説パネルの設置の方が重要ではないかとの結論に至った。こうした方針により、とくに「先史・古代」コーナーのメイン展示に位置づけられる銅鐸の展示設計を進めることとなった。

■アンモナイトのハンズオン展示

新常設展では、ハンズオン展示を増やすこと目指したが、これはそのうちのひとつである。視覚障がい者のリードユーザーを含む小グループにより検討を進めた。実際にリー

ドユーザーにアンモナイト化石の触察をしてもらい、それにより視覚情報以外の情報の性格、展示理解のための課題などについて検討した。ハンズオン展示は、触察によりかつて存在した生物としてのアンモナイトを知ってもらうためのものであるが、現存する化石を触るだけでは、その生物としてのアンモナイトを知ることができないという気づきがあった。

ここでの気づきにより、アンモナイトの殻部分（化石）だけではなく軟体部分も再現することにより触察による理解を促進する展示デザインに変更することになった。また、冷たい印象を受ける化石を触るのではなく、木製レリーフによるハンズオン展示を製作し、読み解きラインに設置した。

■板碑のグラフィックパネルデザインと展示デザイン

板碑は「中世」の展示コーナーでの看板展示であたる資料で、これは供養塔として建てられた石塔である。ただし、その意味や近世、近代の石造物との区別は、利用者には難しいと考えられた。そこで、外国籍（とくに日本の教育課程で教育を受けていない人）のリードユーザーとの協業により容易な理解に導けるデザインの検討を進めた。

文字情報に寄らず理解できる展示にするため、展示資料をリードユーザーとともに観察し、各国各地域の仏教を想起させる「蓮の花」の画像が6点の展示資料すべてに刻まれていることを確認した。この画像についてビジュアルな解説をすることにより展示理解を促進できるのではないかと展示改善の方法を提案した。あわせて、板碑に刻まれた情報を利用者が観察できる照明設備の重要性を指摘した。こうした提案が、展示製作で反映された。

④インクルーシブデザインワークショップ（3回目）

開催日：2020年8月28日

ファシリテーター：塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館）、
山田小百合氏（NPO 法人 Collable）

リードユーザー：6人（徳島県国際交流員1人、徳島県国際交流協会多言語相談員1人、徳島大学留学生4人）

参加者：博物館職員、乃村工芸社社員

このワークショップを実施した時期は、展示製作期だった。展示パネルなどの原稿執筆や展示解説の翻訳、多機能解説設備（遊山ナビ）上での多言語解説の整備を予定していたため、そのための方法や課題を探るため、外国からの来館者にわかりやすい展示方法の検討を行った。とくに、翻訳対象言語の英語、中国語、韓国語を母語とするリードユーザーから意見をもらうことを目的として実施した。

⑤インクルーシブデザインワークショップ（4回目）

開催日：2020年9月18日

ファシリテーター：塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館）、
山田小百合氏（NPO 法人 Collable）

リードユーザー：5人（徳島県国際交流員1人、徳島県
国際交流協会多言語相談員1人、徳島
大学留学生3人）

参加者：博物館職員、乃村工藝社社員

④での検討を踏まえ、各リードユーザーからの意見にも
とづいて、恐竜、古代瓦、銅鐸、自然の各テーマについて、
具体的な展示方法、解説方法を検討した。

常設展には、「遊山ナビ」という多機能展示解説システ
ムを設置した。これは、タブレットやスマートフォンのア
プリを使い、WEB上で多言語による文字解説や音声ガイ
ド、ARやVR映像の視聴などのできるシステムである。
ここで採用する多言語解説の作成のため、この時期に実施
したワークショップが具体的な検討において活かされた。

（3）「徳島まるづかみ」事業における利用者参加型の取 組み

この事業を実施したのは、展示設計を終え、展示製作を
行っていた時期であった。ここでは、新常設展で想定され
る展示資料や展示手法を試行的に展示し、ワークショップ
などを通じた観覧者とのコミュニケーションを図り、新常
設展に活かせる意見聴取を目的のひとつとした。とくに、
県西部の美馬市立図書館、県南部の海陽町立博物館と連携
したことで、普段とは異なる観覧者層や地域住民の視点に
接することが可能となった。この事業における試行や検討
は、以降の展示製作にも少なからず反映された。

徳島まるづかみ展・県央編第1期（2020年11月3日～
12月3日）では、新常設展の全体で使用する代表的な展
示デザインのひとつであった読み解きラインを仮設し、展
示パネルを展示ケースの手前に設置して展示した。また、
新常設展で使用する展示デザインを試作し、見やすさ、好
み、デザイン意図の伝わりやすさなどについて、利用者か
ら意見聴取をした。

徳島まるづかみ展・県央編第2期（2020年12月1日～
2021年3月21日）では、新常設展のロビーゾーンで想定
していた棚型展示を実際にロビー展示することで、展示デ
ザインの確認を行った。

徳島まるづかみ展・県西編（2020年12月18日～2021
年1月18日）を美馬市立図書館で、徳島まるづかみ展・
県南編（2021年2月9日～3月14日）を海陽町立博物館
で実施した。ここでは、新常設展での主テーマである「徳
島らしさ」の追究に関して、県西部、県南部の施設で展示
を行い、展示解説やワークショップを通じて意見聴取をし

たり、コメントを書いてもらった付箋を貼り付けてもらう
コミュニケーションボードを設置したりして、展示利用者
にも検討に加わってもらえるよう試みた。

「徳島まるづかみ」事業では、展示製作段階での展示デ
ザインやポイントとなる展示手法への利用者の反応や意見
聴取を行った。展示を試作することにより、設計図面上で
は確認できない展示や展示デザインの問題点を見つけ、そ
の後の検討に活かすことができた。そのプロセスで、展示
製作者側の視点だけでなく、一部ではあるが展示利用者の
視点を獲得できたことに意義があった。

（4）常設展リニューアルの前段となった取り組み

部分的ではあるがインクルーシブデザインに取り組み、
それを展示製作のなかで具体化していったことがこの常設
展リニューアルの特色と言える。こうした検討の前提には、
それ以前からの取り組みがあったことを補足しておかなけ
ればならない。

当館は、2015年度に実施した文化の森開園25周年記念
事業「安全安心の文化施設モデル事業」や2014年度「み
んなで創るユニバーサルミュージアム事業」に参加し、バ
リアフリー化に向けた取り組みを行ったことがあった。こ
れは、当館が設置される文化の森総合公園内の各館（とく
に徳島県立近代美術館）と連携して実施したものであった。

こうした事業のなかで、当館は、ユニバーサル化に向
けて、具体的な取り組みを進めた。2014年にはイベント
ボランティアとの協働により、ハンズオン展示の開発や
手話通訳付きバックヤードツアーの実施などを、2015年
度は各種サインの見直し、常設展の解説パネルの見直し、
WEBと連動させた英文解説の追加など、常設展の改善を
行った。

4 常設展リニューアルオープンに向けた最終工程で残さ れた課題

常設展リニューアルに向けた様々な検討結果を受けて、
それを可視化、具現化していったのが展示製作の工程だっ
た。ただ、どのような取り組みにも制約があり、限界があ
る。そのため、取り組みのなかで生じた課題やそれまでの
活動のなかで生じた課題については、今後さらに検討を続
けていく必要がある。

こうした意図のもと、2022年4月26日には「常設展リ
ニューアル振り返り会」を行った。これには、博物館職員
に加え、展示製作会社の乃村工藝社からも実際に一連のリ
ニューアル事業に関わったスタッフ9名が参加した。また、

各種ワークショップを通じてファシリテーターの立場でリニューアル事業に関わってくれた2名が、コメンテーターとして参加した。

展示利用者によるアンケートや視察者などによるコメント、展示批評などによると、満足度が高く、概ね当初の目的を達成できていることを確認できた。一方で、展示製作側の視点から改めて検証した場合、具体的な課題を共有することができた。ここでは、記録としての意義を踏まえ、おもなものについて記しておきたい。

■展示替えしやすいフレキシブルな展示設備になっていない点

フレキシブルに展示替えできる展示を目指していたにも関わらず、そうならなかったコーナーが多い。諸般の事情によりウォールケースの設置を予定していた場所が移動ケースや展示ステージ上での露出展示になったところが多い。また、やむを得ず露出展示に切り替えたコーナーもある。これにより、展示できる資料が限定されることで、展示替えが困難なものとなった。

こうした問題点があるものの、歴史・文化コレクションや自然史コレクション、県民コレクション、コミュニケーションゾーンなどでは定期的に展示替えを行っていることから、旧常設展よりも展示替え件数は増えている。

■展示資料に対するライティングの不適合

必要以上に資料の影が現れたり、対面するコーナーの照明がケースのガラスに映り込んだりと展示全体を通じて問題点があった。設計図面からは想定できないし、照明の調整は展示の最終段階での作業であったことから、十分に検討できないままの設置となったことに要因がある。

■読み解きラインと資料や展示ステージへの近接による視界の遮り

読み解きラインの設置は、概ね成功していると言える。しかし、一部のコーナーでは、幼児や車椅子からの目線では、読み解きラインに遮られて見えない展示もある。インクルーシブデザインワークショップを通じて検証した内容ではあるが、すべてのコーナーで検証結果を応用して施工できていなかった。

■展示パネル、ラベルなどの英訳の未完成

当初はパネルやラベルの資料名の英訳を試みたが、英訳困難な人文系の展示資料が多く、結果的に日本語のみの表記となった。継続した作業を進めることが課題である。

こうした展示製作工程での積み残しに加え、展示設計時には意識してはいたものの、スペースの限界や展示構成から実現できなかった課題もあった。先述のとおり、「実物

資料との出会い」を常設展の特徴のひとつとした。実際に旧常設展よりも全体の展示資料数は約1.5倍に増え、実物資料による展示としての迫力が増したとのコメントをもらうことも多い。しかし、まだ不十分だというのが所感である。収蔵庫にある展示可能な資料をできるだけ公開することで、博物館全体としてさらに多くの資料の受け入れを可能にするといった意図が背景にはあった。そのことにより、将来にわたりさらに多くの重要な資料の受け入れと展示（展示替え）を可能にし、ひいてはそのことが県民もしくは社会の付託に資するからある。この点は、展示のみではなく、収集保存の方針や博物館運営の方針とも関わる課題である。

5 おわりに

本稿では、常設展リニューアルのプロセスについて、とくに利用者参加型の取り組みにクローズアップした形で紹介してきた。展示が多様な利用者に向けたものである以上、利用者や利用者になりうる人びとを巻き込んだ設計や製作を行うことは当然のこととも言えよう。そう述べるのは容易なことだけれども、ただでさえ業務量が多く、時間の足りないリニューアルの工程下で、多様な利用者を巻き込んだ事業展開は困難を極めた。

県民とともに新常設展を考えるワークショップでは、展示の構成やあり方について、ともに考え、実際の展示に反映させた。インクルーシブデザインワークショップでは、展示手法について、ともに考え、一部を展示に反映させた。「徳島まるづかみ」事業では、試作段階の展示手法や展示資料について、ともに考え、展示製作の糧とした。こうしたひとつひとつの工程は、展示製作側の博物館や展示業者にとっては、構想し、計画したとおりに展示を完成させるだけでよいというものではなかった。ときには、博物館利用者などによる第三者の視点を取り入れ、学び、顧みて改めながら進めていった工程であった。

最後にこうした常設展全面リニューアルの工程を経た後の課題について、2点を述べて稿を閉じることにした。

第1は、4章でも触れたが、常設展の特徴のひとつとした「実物資料との出会い」を実現し続けるためには、それに耐える継続的な博物館活動のバックグラウンドが必要である。調査研究、収集保存の継続的な取り組みは当然のことであるが、その基盤となる博物館運営（マネジメント）が重要である。こうした課題対応についても、利用者参加型で突破口を見出していくことが有効な手段となるかもしれない。

そして第2は、博物館職員の入れ替わりや組織体制の変化への対応と、常設展運営を含めた業務の継承である。常設展の構想や目的は、リニューアルの工程に直接関わらなかった職員にとっては希薄なものになるのはやむを得ないが、その格差を埋めることも必要である。業務における継承とともに、本稿における記述がその一助となればと考える。

注

(1) 磯本(2022)では、常設展リニューアルのプロセスで2020年度に文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業として実施した「飛び出せ博物館!!『徳島まるづかみ』事業」と、そこでの作業が実際の常設展に結びついた成果について報告した。

(2) この点は、第5期中中期活動目標(2024～2028年度)にも引き継がれた。

(3)「徳島まるづかみ」事業実行委員会編(2021:26)及び徳島県立博物館編(2021:5)は、これとほぼ同じ内容を図化して掲載している。

(4) 元来はあらゆる人が社会において排除されず包摂的であるといった意味で使用される用語であるが、ここでは、博物館のあらゆる利用者を想定して使用している。

(5) カセム・平井・塩瀬・森下(2014)では、インクルーシブデザインは、参加型デザインの方法、あり方として提示される。

(6)「徳島まるづかみ」事業実行委員会(事務局:徳島県立博物館)が主催した、2020年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業「飛び出せ博物館!!『徳島まるづかみ』事業」を指す。この事業については、「徳島まるづかみ」事業実行委員会編(2021)による報告がある。以降、事業名は省略して表記することとする。

(7) 展示室内設置した展示解説パネル配置やハンズオン展示のための台である。展示ケースや展示ステージの手前に設置し、画像の多い親しみやすい展示解説パネルやハンズオン展示を設置することで展示理解の促進を目的とした設備である。展示資料より手前にあることで、利用者が展示パネルを読みやすくなる一方、展示資料までの距離が遠くなったたり、展示への視角を阻害したりするといったデメリットもある。

参考文献

- 長谷川賢二・鎌田磨人. 1998. 総合博物館・地域博物館としての徳島県立博物館の方向性―常設展更新に向けての検討から―. 徳島県立博物館研究報告, 8:1-24.
- 磯本宏紀. 2022. 「徳島まるづかみ」事業と地域連携―徳島県立博物館の常設展リニューアルをめぐる―. 日本民俗学, 312:294-299.
- ジュリア・カセム・平井康之・塩瀬隆之・森下静香編著. 2014. 「インクルーシブデザイン―社会課題を解決する参加型デザイン」. 学芸出版.
- 徳島県立博物館編. 2015. 徳島県立博物館年報, (24). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2016. 徳島県立博物館年報, (25). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2018. 徳島県立博物館年報, (27). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2019. 徳島県立博物館年報, (28). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2020. 徳島県立博物館年報, (29). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2021. 徳島県立博物館年報, (30). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2021. 徳島県立博物館常設展図録 徳島まるづかみ―“いのち”と“とき”のモノ語り―. 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2022. 徳島県立博物館年報, (31). 徳島県立博物館.
- 徳島県立博物館編. 2024. 徳島県立博物館展示案内 ゆたかな自然, 多様なくらし. 徳島県立博物館.
- 「徳島まるづかみ」事業実行委員会編. 2021. 飛び出せ博物館!!「徳島まるづかみ」事業事業報告書. 「徳島まるづかみ」事業実行委員会.
- 徳島県教育委員会編. 2018. 徳島県立博物館新常設展基本構想.
- <https://museum.bunmori.tokushima.jp/redesign.hp/pdf/kihonkousou.pdf> (2024年11月30日閲覧)